

二〇二五年九月六日

洩れ日射す秋海棠の綴る道
府境を跨ぐ丘の上天高し
草の戸を訪ひし一步に鉦叩き
蔵町の堵列すうだつ秋日影

二〇二五年九月五日

一穢なき真澄の空の月仰ぐ
ころころと円き音する陶風鈴
疾くゆける雲は野分の尻尾かな
青富士の泰然として野分晴
朝露のダイヤモンドや明日香道

二〇二五年九月四日

ナイフの刃入るるや否や梨飛沫
お地蔵に籬をなせる木賊かな
月光に濡るるにまかせ石畳
枝豆とビール供へて忌を修す

二〇二五年九月三日

姿見に夏痩せの背な伸ばしけり
ため息や残暑の道を迷ひけり

二〇二五年九月二日

神木の樹下に賜る風涼し
咽ぶごと響く胡弓や風の盆
栗多く見えるやう盛る栗ご飯
水切れしゴーヤー真つ赤に怒りをり
参道へはみ出し実紫たわわ

明日香

せいじ

むべ

ぼんこ

むべ

あひる

康子

山椒

明日香

むべ

ぼんこ

わたる

たか子

なつき

たか子

やよい

千鶴

なつき

よし女

ぼんこ

二〇二五年九月一日

崩すまじ丁寧に煮る栗南瓜
打水に命浮き出し石畳

二〇二五年八月三十一日

空蟬のしかと爪たつ力石
漣に現れては消ゆる秋の山
水遣ればどの草も辞儀繰り返す
漣のとゆきかくゆき水澄める

よし女

康子

ぼんこ

せいじ

よし女

せいじ

毎日句会みのる選・二〇二五年九月八日